

《ことのは》から《ロゴス》へ

— 英語教育と日本語教育の接点 —

高 島 敦 子

一 《理科系の作文》と《英作文》——序にかえて

大学生に英作文を教えるはじめてはや二十年。この間、何をどのように教えればよいのかという問題には、つねに悩まされてきた。今から八年前に、木下是雄著『理科系の作文技術』^①を読み、著者の方法論が、私の英作文授業の方法論といろいろな点で一致しており、私の方法論を補ってくれるのではないかと感じた。そこでさっそく、この書物を、私の英作文授業の必携参考書の一つにした。

木下氏はこの書物で、「仕事の文書」の書き方を指導している。仕事の文書とは、氏の言葉を借りれば、「内容が事実と意見にかぎられていて、情動的要素をふくまない」文書のことである。この書物に出合う以前から、私はこの授業で、毎週必ず、与えられた文型を使って、自分の体験したことを二十五語から三十語の英文に書いてくる課題を出していた。自分のしたこと又は見聞きしたこと、すなわち事実だけを書き、考えや感想はいっさい書いてはいけないのである。だから、主観的な形容詞（たとえば beautiful）は絶対に使ってはならないし、一般的な言い方や漠然

とした言い方(たとえば I went to a park with a friend to play.)ではなく、具体的に、人と場所は原則として実名を使って書かなければならない(たとえば I went to Hibiya park with Taro to throw frisbees.)。主動詞はむろん過去形を使う。そして、それがいつ、どのような状況の下で行われたのかということも付け加える。

私の、それまでの十余年にわたる英作文指導の試行錯誤の中から、必然的自然的に生れたこれらの条件は、木下氏が事実の記述の特徴として上げている諸条件に、偶然にもぴたりと一致していた。すなわち、「一般的でなく特定の」であり、「抽象的でなく具体的」であり、「漠然としておらずはっきりしてい」て、「できるだけ名詞と動詞を使い、主観に依存する修飾語は使わない」こと、また、いわゆるジャーナリストの定石の 5WとH (what, when, where, who, why, how)に必要なかぎり言及すること、などである。その他、「必要なことは洩れなく記し、必要でないことは一つも書かない」、「(論理の飛躍を、読者が自分で補ってくれることを期待せずに)くどいほど明確に論理の筋道を立てて書かなければならない」などの注意事項は、私も必要に応じて利用させていただいている。

木下氏はこの書物を書くにあたって、アメリカの小学校から大学までの、六種類の英語の教科書を参考にして、アメリカ人にとっての英語は、日本人にとっての国語である。アメリカでは小学生のときから始められる、国語におけるこのような言語訓練が、日本ではどの程度重要視されているだろうか。現状はどうも否定的のようである。私は、この書物を参考書として使いはじめた年(一九八二年)の終りに、私の英作文を受講した約三十名の学生に、この書物の読後感を書いてもらった。その中に、この本に書いてあるような作文技術を、小学校の国語の時間に習いたかった、という感想があった。それから、「理科系云々」という題名にはじめは違和感を抱いたが、読んでみたら文化系の勉強をしている自分にも大変役に立つことがわかった、という感想もあった。私には、この二つの感想が、現代日本のカリキュラムと言語教育の間のずれを、みごとに言い当てているように思われてならない。

二 現代のカリキュラムと言語教育

明治になってわが国に入ってきた、近代西洋思想と、近代西洋科学の方法論は、現代の日本人の意識構造と知的活動に大きな影響を与えている。政治や社会の諸制度は、すべて西洋からの借りものだ。一般教育科目を、自然科学、社会科学、人文科学の三部門に分類する新制大学のカリキュラムも、十九世紀後半になって専門分化した、近代科学の概念に即して組まれている。

一八七一年（明治四年）に刊行された、福沢諭吉編「啓蒙手習文」の中で、福沢は、読本、地理、数学、窮理学（physics および natural history の訳語で、化学と天文学を含む）、歴史、経済学、修心学（靈心の議論）の七つを、「洋学の科目」として列挙している。⁽²⁾これらの科目は、中には名称の変ったものもあるが、現在わが国の学校で教えられている基礎科目である。国語となった読本はむろんのこと、その他すべての科目（学問）が、日本語を媒介にして教えられている。

ある民族の思想は、その民族の言葉に反映されていると言われている。西洋で生まれたこれらの学問の方法論は、英語をはじめとするヨーロッパの諸言語の発想と、密接な関係があるはずである。

ヨーロッパ語は、ロゴス (logos) の精神に支えられたことばである。ロゴスは、ヨーロッパ諸言語の《ことば》の語源となったギリシャ語で、《取り集める》から《数える》《選び出す》《筋道を立てる》、そして《話す》というふうの意味が変わってきた。⁽³⁾この順序はそのまま、近代西洋科学の方法論になっている。すなわち、論文やレポートを書くとき、私たちはふつう、まず情報やデータを集め、次にその中から適当なものだけを選び出し、順序をととのえて、すなわち筋道を立てて発表する。また、近代に発達した学問の中には、生物学、心理学、社会学（英名はそれぞれ、biology, psychology, sociology）のよう、logos の一部の -log- が、その名称の中に入っているものが

ある。右の二つの例は、西洋の《学問》と《ログス》の間の相関関係を、かなり適切に示していると思う。

一方、日本語の《ことば》は《ことのは》に由来すると言われている。ことのはとは、人間が口にする言^{こと}は、事柄の一端しか伝えることができない、だから言葉はあまり重要ではないのだ、という認識から生れた概念である。⁽⁴⁾日本人は一般に、ものごとの起る《根拠》や、事柄の正否を《判断》するための《理由》を、執念ぶかく追求しない。すなわち、言葉を盡くして《議論》をしない。ものごとは、以心伝心に了解され、問答無用の形で決定されることが多い。いま括弧にくくった、根拠、判断、理由、議論は、すべてログスの概念である。⁽⁵⁾

「広辞苑」の《ことば》の項には、「人の音声の意味を持っているもの。それを字にあらわしたもの」につづいて、「ものの言い方。口ぶり。語気」、「言葉のあや。事実以上に誇張した表現」、「文学の表現としての言語。詩歌、とくに和歌」などの定義が並んでいる。このことから、日本人は伝統的に、言葉そのものの持つ意味内容よりも、それを口にする人間の態度や気持ちや感情を尊重してきたことがわかる。

このような言語観を持ち、言語習慣を持つ私たち日本人が、研究論文や、報告書や、説明書や、業務上の書簡などを書くとき、すなわち、言葉を論理の伝達手段として使わなければならないとき、これまでの発想を転換し、新しい方法論で言葉を使う必要があるのではないだろうか。それは、どうも、「理科系の作文」の方法論のような気がする。

三 事実と意見

理科系の作文の方法論、すなわち、木下是雄氏のいう仕事の文書作成の方法論でまず大切なことは、事実を正確にして簡潔に叙述し、筋道を立てて意見を発表することである。この場合の意見は、主観ではあるが、いくつかの客観的なデータによって導かれたものであるから、直感的な印象とは区別しなければならない。感覚的ではなく、理性

的に述べられた主観なのである。

以上のことを学生に認識させた上で、私は、英作文の授業で、事実の記述のしかたを教えている。はじめは、英語だけを使って行なっていたが、やがて、同じことを学生の母語である日本語でも行う必要を感じはじめた。このような認識が母語で出来ていれば、それを外国語に応用するのは簡単だからである。

木下氏も述べているが、事実を書くためには、まず、事実（客観）と意見（主観）が区別できなければならない。

そこで、マスメディアの日本語の文章をいくつか選んで学生に与え、その記述を事実と意見に分類させることから始めた。一口にマスメディアの文章といっても、その役割あるいは目的は多種多様である。純粹に事実を伝達するのを目的とした報道記事もあれば、読者の感情に訴えて共感を得ようとする、広告のコピーのようなものもある。この両方の目的を持ったものもある。私の授業では、首相の施政方針演説の草稿からファクション記事に至る、さまざまな文章を取り上げて検討した。その結果、次のようなことがわかった。すなわち一般に日本人の書く文章は、事実を伝えるのがその主要目的である場合にも、意見の記述だけで終っていることが多い、ということである。感覚的な意見だけでなく理性的な意見もある。だが、それを裏づけるデータを示す、という手続きが欠けているのである。次にあげる三つの文章は、その一例である。

A

おかあさんは、わたしのすきなものをつくってくれます。それにわたしのことをしんばいしてくれています。おこるときもあるけど、とてもやさしいおかあさんです。とてもよかったです。〔毎日新聞、一九八六年六月五日、「うちのかぞく」〕

B

新聞のカタカナ用語のはんらんは、目に余るものがあり、これに対する要望が投書されるようになって久しいが、いっこうに改まりそうにはない。(中略)すでに日本語として定着し、日本語化したものは仕方ないが、最近はやたらと新しい外来語が多すぎる。経済大国となり、日本語学習熱が年々、諸外国で盛んになっているのに、日本語で十分間に合うものまで外国語を使うようでは、時代錯誤も甚しい(後略)。(『毎日新聞』、一九八七年一月五日、「みんなの広場」)

C

「何んといっても、木造の一戸建てがいいですよ。主婦の立場から言えば小まわりがきくことでしょうか(中略)これまで訪問した人の中で、店舗デザインを職業にされている方のお家、とてもすばらしいと思いました。店舗というのは、見た目の美しさに加えて使い勝手のよさが命でしょう。そうした思想がご自分の住まいにも見事に生かされているんですね(中略)生活にポリシーのある人、こんな人がとてもステキで自由な住まいを建てている人だというのが実感ですね」(『朝日新聞』、一九八七年九月二七日、「K・M子さん 住まいを語る」)

Aは、ある小学生の母親紹介の文章であるが、これを読んでも、この母親の具体的なイメージは浮んでこない。彼女が作ってくれる料理についても同様である。それは、この文章が、「わたしのすきなもの」「しんばいしてくれています」「おこるときもある」「とてもやさしい」「いいおかあさん」などのように、一般的で主観的な記述、すなわち意見だけから成っていて、事実が一つも書かれていないからである。

Bは、「カタカナ用語の追放に努力せよ」と題された、一読者からの投書である。この文章にも、「これに対する要

望」「日本語化したもの」「新しい外来語」「日本語で十分間に合うもの」などのような、一般的な、あるいは漠然とした記述が目立つ。中略、後略の部分にも、それを裏づける具体的なカタカナ語は示されていない。投書は意見である。しかし、具体的なデータの上面に展開されない意見は、オブジェクトに包まれた御馳走のようなもので、読んだ（味わった）あとに一抹の物足りなさが残るし、必ずしも、その意味が正確に理解されるとはかぎらない。

Cは、テレビリポーターのK・M子さんが、記者とのインタビューで語った内容を、記者が書き表わしたものである。だから、これは、正確には話された文章である。ここにも、「小まわりがきく」「すばらしい」「使い勝手のよさ」「そうした思想」「生活にポリシーのある人」「ステキで自由な住まい」のような、一般的、抽象的な表現が多い。この場合も、省略した部分に、Kさんが実際に訪問して見学した家の間取りや、建築材料や、インテリアなどに関する具体的な情報は一つも提供されていない。インタビューした記者も、その点についてくわしく追求していないようだ。この文章は、Bと同じような物足りなさを読む者に感じさせるだけでなく、筆者（この場合は話者）の意見が独断と誤解されてもしかたのないような状況を作り出している。

四 話者中心の発想

客観的な情報が必要とされているときに、主観的な意見や感想しか提供されなくても、提供する側もされる側もあり不都合を感じないで満足してしまう傾向が、日本人一般にはあるようだが、なぜだろうか。このことは、まず、二で指摘した《ことのは》の概念、すなわち日本人の伝統的な言語観と深い関係がありそうだ。人間が口にする言は、実際に世の中で起っている事のほんの一端しか伝えていないことが多い。だから言葉に信憑性はあまりない。言葉は言葉として——たんなる音声や文字という形式として——聞き流し見すごしてもかまわないのだ。こういう考え

方である。だから、ある発言にあいまいな箇所や意味不明な箇所があっても、話し手にその点をいちいち問いただしたりしない。とくに話し手が、聞き手よりも年令や身分が上の場合に、この傾向は強まるだろう。

次に、日本語の性質そのものが、客観的叙述に向いていないから、話し手にとっても聞き手にとってもまったく同じ意味を持つ発言はないのではないか、ということも考えられる。

日本語の文は詞と辞の結合であると言われている。詞は対象を客体化した概念語で、名詞、動詞、形容詞から成る。辞は話し手の主観を表わす観念語で、助詞、助動詞、感動詞から成る。このような性質を持った日本語にとって、はたして、純粹に客観的な表現は可能だろうか。

日本語では、《ほしい》《うれい》《いやだ》のような、主体の意志や感情を表わす動詞や形容詞を二人称に使う場合には、《か》《の》《だろう》のような疑問または推量の助詞をつけなければならない。これを三人称に使う場合には、《らしい》《がる》のような、推量の意味を持った助動詞または接尾語をつけなければならない。英語ではこのような操作は行なわれない。英語では、“I wanted money.” “You wanted money.” “My brother wanted money.” のように、主語の人称が変わっても動詞 *wanted* は変らない。しかし日本語では、それぞれ、《わたしは》《金》がほしかった《君は金》がほしかった《弟は金》がほしかった《又は》《……金》をほしい《た》》と言わなければならない。あくまでも話し手の立場の発言になるわけである。

このように、主体の意志や感情や判断などが、ある概念の言い表わし方を左右する傾向は、ロシア系代名詞の用法にも見られる。英語では、すでに言及された単数の非人称名詞は、必ず *it* で受ける。しかし日本語の場合は、主体の対象にたいする物理的・心理的距離によって、《これ》となったり《それ》となったり《あれ》となったりする。国語学者大野晋氏は、《これ》を話し手自身（一人称）に属するものを指す語、《それ》を話し手と聞き手（二人称）が共有するものを指す語、《あれ》を、話し手と聞き手にとって遠くにあるもの、あるいは両者にとって未知のもの

を指す語、というふうに分類している。⁽⁷⁾

また、日本語では、「予定日は来月の五日でしたね」とか「来年は猿年だったわね」などのように、未来のことを過去形で言い表わすことができる。日本語教育者の山下秀雄氏はこの理由を、日本語の過去は話し手にとって過ぎ去ったことであって、英語のように、聞き手や第三者の立場をふくむ、客観的な過去としてはとらえられていないからだ、と説明している。⁽⁸⁾

英語の発想が概念や事象中心であるのにたいし、日本語の発想は、このように話者中心である。日本語はまさに、「話し手の実感において話される言葉」⁽⁹⁾なのである。だから、わが国の天気予報は多くの場合、たとえばアメリカのようにデータを羅列するだけでは終わらない。⁽¹⁰⁾いや、むしろ、予想最高気温、湿度、風速などを、もっとも具体的な数字で示すかわりに、「日中は背中が汗ばむほどの陽気になるでしょう」だとか、「きょうはきのうより二、三度上って暖くなるでしょう」(きのうの気温は示されない)などの表現を好んで使うようである。天気予報は、科学的観測と分析の結果得られる情報で、それを発表する予報官の人格とは何の関係もないはずである。ところが日本では、「天気予報がはずれた」と言う角が立つので、「天気予報以外で雨が降った」と言いなおすような、欧米社会では考えられない配慮がされるのである。⁽¹¹⁾

五 事象中心の発想

このような日本語の発想は、合理的で機能的な人間関係よりも、温情的で融和的な人間関係が優先される場合には有効に働くであろう。しかし、思想や理論の発表を目的とする学問の世界や、情報の正確な伝達が主要目的と考えられているようなマスメディアの分野では、この発想が邪魔になることは明らかである。私たちは、そのような場では、

意識的に、話者中心の発想を事象中心の発想に切り換えるべきではないだろうか。私は、このような発想は、訓練によっていくらでも身につくと思っている。次に上げる二つの文章は、おもに事象中心の発想で書かれている。

D

ばくの家の店で海水魚をかつている。中でも、もっともきれいなスズメダイの元気君は、水そうの中のガキだいしょうです。みんながたべているえさをぜんぶよこどります。元気がよすぎて水そうからとび出します。でもかわいいです。〔毎日新聞〕、一九八六年六月二〇日、「うちのかぞく」

E

映画館で日本語の字幕付き映画を見ていた時、俳優が「wife」というと字幕に「ワイフ」と出たのでいらいました。日本語には「wife」にあたる言葉が少くとも四つはあるのになぜ安易に外来語で片付けてしまうのでしょうか（中略）フランスでは努めて外来語を締め出そうとしています。日本も同様の努力をしてほしいものです。〔朝日新聞〕、一九八七年九月二六日、「声」

Dは、三で取り上げた文章Aと同じ「うちのかぞく」欄に掲載された小学生の文章である。Aにくらべて二〇字多いただけであるが、「スズメダイ」「元気君」「えさをぜんぶよこどります」「水そうからとび出します」という具体的記述が四箇所もある。これらの事実が、「きれいな」「ガキだいしょう」「元気がよすぎて」「かわい」などの意見の裏づけとなっている。意見と感想だけのAにくらべて、ずっと読みごたえがある。自分の家族の性格を描写するといふ、このシリーズの目的を、短い文章の中でちゃんと果している。つまり、かぎられてはいるが、確かな情報が提供

されているのである。ついにながら、このような、事実を的確にしかも効果的に記述した文章は、私がこのシリーズから恣意的に選り出した十篇の文章のうち、これ一つだけだった。

Eは、『アサヒイブニングニュース』から転載された「外来語より美しい日本語を」という読者の投書である。投書者はイタリア人であるが、この文章は英語からの翻訳であろう。だから、発想がヨーロッパ語の発想であることが一目瞭然だ。しかし日本語としても、投書者の主張を伝えるという点でこの文章は完璧である。中略の部分をふくめてわずか二四〇字の全文の中に、『ワイフ』という具体例をはじめ、この語の日本語訳が「少なくとも四つある」という具体的な指摘がある（その四語が何であるかはここでは問題でない）。Eが、三で取り上げた文章Bの、一般的、抽象的な外来語排斥論にくらべて、はるかに説得力があることは、誰も否定できないだろう。

このように、具体的データをもとにして自分の考えを筋道立てて述べることは、発想さえ変えれば日本語でもできるのである。このことは、よく言われるように、日本語そのものが情緒的であったり非理論的であるのではなく、日本語を使う日本人の発想が一般にそうなのだ、ということを実証している。

六 ロゴスの精神と国際性

現代が国際化時代であると言われるようになって久しい。二十一世紀に向けての国際交流は、一昔まえのように、アメリカや西欧諸国だけとの交流を意味するのではないことはいままでもない。しかし、その交流の場では、英語が依然として使用語の中心的な位置を占めるであろう。では、英語ができれば、これからの国際社会で支障なく生きていけると考えてよいのだろうか。

最近、わが国でも国際会議がひんばんに開かれるようになった。国際会議で使われる言葉は、今までは英語が圧倒

的に多かった。そのため、英語の不得手な日本人は、そのような場所ではあまり発言しないと言われてきた。日本人が国際的な会議や集りで沈黙を守っている理由は、はたして、使用語の英語ができないからだけだろうか。一九七八年の八月に福岡市で開かれた、福岡ユネスコ協会主催の国際シンポジウム（世界十八箇国から二三〇人の出席者があつた）は、すべて日本語で行なわれた。ところが、ここで弁舌を振ったのは、イタリーや韓国からの代表で、日本人は相変わず沈黙を守っていたさうである。⁽¹²⁾

前にも触れたが、日本語には議論という概念はない。わが国で議論（又は会議）とよばれているものは、ふつう、一方的な説明と一方的な承認に終るか、個人的な感情のぶつけ合いのあと、喧嘩別れに終わるかのどちらかである。発言の内容、すなわち論理と、発言者の人格や感情とを切りはなして考える態度が私たちの身につかないかぎり、まことの議論は行なわれないだろう。

わが国の国語教育の歴史をふり返ってみると、一九〇〇年（明治三三年）に施行された小学校令施行規則第三条の、国語科の教育目標の中に、思想の表現と並んで、智徳の啓発が上っている。教材には文学的文章が多く使われ、⁽¹³⁾ 学習者の美的感受性をはぐくむことが重要視されてきた。大正期（一九二〇—一九三〇年頃）に起り、戦後ふたたび盛んになった生活綴方は、教師との信頼関係の中で生活体験を書きながら、自己の内的生活の充実をはかるという、生徒の精神面の指導には役に立ったが、論理の表現や伝達のしかたを教えるという点では、あまり効果はなかったように思う。⁽¹⁴⁾むしろ、わが国の伝統的言語教育は、学習者の道徳的情緒的そして人格的な育成に重きをおいてきた感がある。

わが国には歴史的に、主客の同化をよしとする自然観や社会観が一般的であつた。それは自律的ではなく他律的な価値判断や、個人志向ではなく集団志向の行動様式となつて、現代の日本人一般の精神構造を支配している。この精神構造は、中世以来の封建的人間関係の中で強化され、社会生活の中ではっきりものを言うことを否定する習慣を定着させた。しかし、学問や教育をはじめ、政治や社会の制度がすべて、近代西欧諸国のそれに倣つてつくられた現代

の日本において、言語習慣と言語教育の方法論が旧態依然としているのは、どう考えてもおかしい。

私は、長い間わが国に欠けていた、科学的合理的思考を益々くむ言語教育、言いかえれば、ロゴスの精神に則った言語教育は、私たち日本人が西洋から輸入した諸制度を正しく理解し、それを有効に利用運営し、十分にその恩恵にあずかるために、絶対に必要なことだと思っている。それは、日本社会のまことの近代化と、日本人のまことの国際化につながるのではないだろうか。

わが国で、もっとも広く学ばれているヨーロッパ語は英語である。私は、これからの英語教育の役割の一つは、英語の発想にもとづいた言語訓練を日本語でも行ない、そのような能力を備えた人物を、英語科だけでなくすべての教科の教師として世に送り出すことではないかと考えている。とくに、ものごとの因果関係を説明したり規定したりする、数学や理科や社会科は、ロゴスの精神に則った言語教育をするのにもっとも適した素材であることを考えると、この分野の教師にこの能力が必要なことは、誰の目にも明らかだ。他の教科でも、教師は、生徒に、記述形式で出させる研究論文やリポートの作成のしかたはもちろん、日常会話を含めた教室での口頭発表のしかたについても、適切な指導ができなければならない。このように考えてくると、私の提案する新しい英語教育の役割は、一人英語教師の肩に負わせておくには重すぎる。国語をはじめ、その他の関連教科の教師たちの助言と共同作業が、ぜひとも必要だ。私は、それらの人々に、近い将来、英語教育と日本語教育を綜合した、新しいタイプの言語教育をわが国のカリキュラムに組みこむことができるよう、ともに働いてくれることを願いたい。

前にもふれたが、わが国では、国際的であることイコール英語ができること、というような等式が、依然としてまかり通っている。私は、この二つの特性がまったく無関係なものだとは思っていない。しかし、国際的だと言われる人がたまたま身につけている英語力は、一種の副産物であり手段であって、国際性の中味はもっと別のものだと思っている。

国際性を一言で定義するのはむずかしい。国際政治学者グレゴリー・クラーク氏は、国際化時代の日本の首相に望まれる条件の中に、合理主義のルールおよび議論と妥協の運び方を知っていることを上げている。⁽¹⁶⁾これこそロゴスの精神でなくて何であろうか。私は、このような能力は、現代の国際社会に生きるためには、一国の首相にも一介の市民にも、同じように必要とされている能力だと思う。

英語と国際性の間に短絡的に引かれてゐる等式記号を一扫し、今までの英語教育がその意味で犯してきた過ちを正すために、私たち英語教師はまず深く反省しなければならない。そして、右に述べた新しい言語教育の一端を担うために、心を新たにして出発しなおさなければならない。この努力が実ったとき、私たち日本人も、まことの議論ができるようになるに違いない。それは又、日本人が国際性獲得に一步、いや数歩も、近づくことを意味するだろう。

注

- (1) 木下是雄、『理科系の作文技術』、中央公論社、一九八一年。
- (2) 山住正巳校注、『日本近代思想大系』八巻、教育の大系、岩波書店、一九九〇年、二〇一―二二ページ。
- (3) 大野 晋、『日本語をさかのぼる』、岩波書店、一九七四年、六三ページ。
- (4) 同、六二ページ。
- (5) 明治以降、日本語の文体に影響を及ぼした西洋の概念は、一、二人称複数語（諸君）、二、定義、三、分類または列挙、四、句読点の用法、五、括弧の用法、六、論理用語（否定詞、および、または、もし……ならば）、七、接続詞（なぜならば、ゆえに）などであった。（加藤周一、『明治初期の文体』、『日本近代思想大系』十六巻、文体、岩波書店、一九八九年、四七七―四八七ページ。）このうち接続詞は、命題相互の因果的規定、すなわち、原因、理由、根拠などを明らかにする語であると言える。
- (6) 時枝誠記、『国語学原論』、岩波書店、一九七一年、二三―二二二ページ。
- (7) 大野 晋、『日本語の文法を考える』、岩波書店、一九七八年、七三―七五ページ。
- (8) 山下秀雄、『日本のことばとことば』、講談社、一九八六年、七五―七七ページ。

- (9) 伊丹十三、山下、『日本のことばとところ』の「あとがき」より。
- (10) 弁護士佐藤欣子氏によれば、アメリカ連邦警察(FBI)の捜査報告書も、事実を列記しただけで、日本の場合のように、犯人の心理のアヤや生い立ち、犯行の動機などにはいっさい言及しない。『毎日新聞』夕刊(日付は不明)、「ゆうかんレポート」より。
- (11) 『言語生活』、一九八七年八月号、「耳」より。
- (12) 『朝日新聞』、一九八七年八月一日、「天声人語」より。
- (13) 西尾 実、『国語教育問題史』、『国語教育講座五巻』、岩波書店、一九五一年、一ページ。
- (14) 佐々井英緒、『生活綴方生成史』、あゆみ出版、一九八一年、一〇七—一〇八ページ。なお、生活綴方の方法論はまだ体系化されておらず、その内容は「井戸端会議」的であったり「身の上相談」的である、という厳しい批判もあることが、中内敏夫氏によって指摘されている。中内、『生活綴方』増補版、国土社、一九八六年、二二—二三ページ。
- (15) 一九四七年の「学習指導要項国語科編」には、観察発表、意見発表、会議の運び方などの、論理の伝達を目的とする言語表現が教育目標に組みこまれた。しかし、この試みは、政治的な理由で挫折したと言われている。汐見稔幸、「ことばの教育——教科としての国語」、『岩波講座 教育の方法4 ことばと教育』、一九八七年、二二七ページ。
- (16) 『朝日新聞』、一九八七年八月二六日、「私の宰相論」より。

